

# 斎藤茂吉と手帳

小 泉 博 明\*

【要旨】 歌人で精神病医（青山脳病院院長）であった斎藤茂吉の手帳は、『斎藤茂吉全集』の第27巻（「手帳一」から「手帳四十二」）と第28巻（「手帳四十三」から「手帳六十五」）に収録されている。手帳から茂吉の病誌や、茂吉の青山脳病院の経営の懊悩を読み取ることができる。また、手帳から茂吉の粘着型の性格を知ることができる。

## 1. はじめに

手帳は自らの備忘録であり、他者に公開することを前提としていない。手帳の内容は、概ねメモ書きであり、日時が不明であっても、筆者のみが分かればよいものである。中には、家人にも秘匿すべき内容もあるだろう。ましてや、筆者は死後に出版され公開されることなど夢想だにしない。また、他者が手帳を読む行為は、いくら公開されたものであっても、いささか躊躇し後ろめたいものではあるが、新たな発見が期待できる楽しみでもある。書簡や日記でも不明な秘匿の内容が、手帳で解明できる可能性もある。

さて、歌人斎藤茂吉の手帳であるが、『斎藤茂吉全集』の第27巻（「手帳一」から「手帳四十二」大正8年～昭和12年）と第28巻（「手帳四十三」から「手帳六十五」昭和12年～昭和25年）に収録されている。全部で六十五冊あるが、完全に揃っているわけではなく何冊かは不明である。

その内容は、当然ながら作歌時の備忘録としての性格が色濃く出ている。しかし、茂吉の長男茂太によれば「おやじは、ほくも手帳は好きなほうですけど、手帳がないと一日も暮らせない。手帳になんでも書いた。たとえばヨーロッパに行っているころの手帳を見ますと、非常に絵がたくさん出てくるわけで、船からアラビア半島だとか、シシリー島なんか、言葉で書くよりも先にさっさと絵にかいてしまう。そういうスケッチが非常に多い。」<sup>1)</sup>という。茂吉は肌身離さず手帳を携行し、何でも書き留める手帳依存症であり、現代のスマホ依存症に通底するものがある。

ところで、茂吉の性格は茂太が分析するごとく<sup>2)</sup>粘着型であり、執念深く、一事に対しいつまでも拘泥する。ドイツ留学中に、講演会終了後に精神医学者のクレベリンに握手を拒否されたことは、終生にわたり茂吉の精神的負傷となった。そして、茂吉の随筆に『手帳の記』がある。これは、山陰旅行中に置き忘れた手帳を執念深く追い求める話であるが、その執念に対し

---

\* 教授／日本思想

て読者は辟易するほどであるが、茂吉が生真面目なだけにかえって滑稽なのである。

## 2. 随筆『手帳の記』の考察

1930(昭和5)年10月11日から、茂吉は南満州鉄道株式会社(満鉄)の招待を受け、満州各地を旅行、八木沼丈夫の案内を受けた。さらに単身、北平(北京)を旅行し、帰途11月24日に京城(ソウル)で平福百穂<sup>ひやくすい</sup><sup>3)</sup>画伯と合流した。

翌25日には、平福百穂画伯、中村憲吉<sup>4)</sup>の三人で小郡から山口、津和野を経て益田に向かった。津和野は森鷗外(林太郎)の生地である。鷗外も本業は陸軍軍医であり、茂吉が敬愛していた。そして、益田の青木屋旅館に投宿した。

翌26日、旅館の番頭の案内で、三人で益田の名所である万福寺、医光寺の庭園を見学し、高津の柿本人丸神社に参拝した。茂吉は柿本人麿研究を進めるなかで、特に人麿の没地に関心を寄せ、後に、その成果は帝国学士院賞を受賞することとなる。その後、益田の停車場前で自動車から降り、停車場前の茶屋に寄った。その時に、ポケットに入れていたはずの手帳が無いのに気付くのであった。ここから手帳の探索の顛末が始まるのである。

「はて、おかしいな」と私は思った。ついさっき柿本神社の四阿<sup>あづまや</sup>のところで手帳をつかったのだから、自動車の中に落したかもしれないと思って、停車場前に休んだばかりの自動車の中を見たが、ない。今しがた歩いて来た僅かの距離の往来には無論ない。これは確かに柿本神社の土産を売る店に置いて来たに相違ないと咄嗟のあいだに私は思った<sup>5)</sup>。

そこで、旅館の番頭に、手帳を見つけたら、東京の家にするように依頼して、三人は次の目的地である出雲大社に向かい、いなばや旅館に投宿した。すぐに茂吉は、益田の青木屋旅館に電話をかけ、番頭に問うと柿本神社の店にも境内にも無いとのことであった。茂吉は、心落ち着かず夕食の酒も旨くない。不安が募るばかりである。茂吉は「つまらぬ手帳だけれども、北平の土地を踏んで来た手帳だけに、惜しい気がして、そう単純に諦めが付かない」<sup>6)</sup>という。さらに自らの性格を分析し「特に私の性質はこういうときに、人一倍諦めが悪くて、煮えきらないのである」<sup>7)</sup>という。夕食後、もう一度益田に電話をかけ、番頭にもっと丁寧に捜索するようにお願いした。しかも「番頭の奴、碌にさがしもしないのではあるまいか」<sup>8)</sup>という疑念までも起こした。ここが茂吉らしい性格である。その晩は寝付きも悪かった。

翌日になり、出雲大社に参拝したが、茂吉は咄嗟に二人の制止も聞かず再び益田へ行く気になった。この咄嗟の行動を「いつも逡巡して煮え切らない私としては誠に不思議なものであった」<sup>9)</sup>という。益田駅で降車し青木屋旅館に直行し、番頭と共に再び柿本神社へ行き、隅々まで調べるが見つからない。次に周辺住民、巡査駐在所、高津小学校の首席訓導に依頼する。首席訓導は全校児童を集め、手帳を見つけたら届けよと訓示までした。茶屋で休憩し、ポスターを5,6枚書き、赤インクで二重丸、三重丸などを付け注意を喚起し、謝礼をなす旨も大書した。このような手筈をした後、益田から小郡へ向かった。途中の青原駅で駅員より手帳が見付

かったと報告を受けた。汽車から、青木屋番頭と平福、中村二氏に手帳発見の電報を打った。11月30日に帰京し数日後に、益田から手帳と番頭の手紙が届いた。

拝啓。御尊台様には、御道中御無事にて御帰東され候や、御案じ申上候。(略) 重用なる御手帳を御ふん失に相成、御心配成され候段は、実に私としてもいかにたへ兼候。(略) 所々家々により尋ね候ひしが、駅前運送店の小使なる者、彼の手帳を拾ひたる事聞き申候にて、直ちに参り候へば、一人の男申すには、荒木なる者ノート一冊駅前にて拾ひ居る旨申し候にて、其様子承り見れば、表紙に、北平ノ其二と記し有る旨申し候にて、現品は見ね共、御尊台様に御安心致さす為め、駅に行き(略) 駅長様に依頼致し、御電話にて申し御知せ致し候次第に御座候。翌廿八日、私が参上致し受領仕り候。(略) 御帰りの際、拾円也頂戴仕り候へども、内五円也を主人様へ預け置き候て、残り五円は郵便小為替にて御返金申上候間御受領下され度候。主人の方よりも五円の内にて拾ひたる御礼を出し、残金御返金致さる可く申居られ候間左様御承知下され度、(略) 拾ひたる者青年にて早くわかり申したるに付此上なき御喜びであります。御旦那様駅前にて自動車下車され、十四、五間位御あるきに相成候頃おちたるものに御座候。(略) 十一月廿九日。青木屋旅館内番頭中島好吉。齋藤旦那様。<sup>10)</sup>

茂吉は、番頭が5円を返送したので、柿本神社への幣饌料として奉納するように依頼した。なお、茂吉の服装はハルピンで買った労働者向けのだぶだぶの露西亜外套であった。ポケットは小さく浅かったのであろう。茂吉は「つまらぬ手帳」と言いながらも、このように執拗なまでに探索する手帳であると、何か特別で、他人に秘匿しておきたい内容があるのではと思う。しかし、その手帳は「手帳二十二」<sup>11)</sup> (北平その二) で、満州各地の遍歴の記録で、スケッチと歌が書かれていたものである。そこまで探索する執着心に驚くばかりである。阿川弘之は「執念深い人が自分の執念深かった話を書けば、それで芸になるというものではあるまい。しつこさがある面白味を伴って、一層の快さに転化して、読む者の気持に訴えて来るのは、やはり文章の力であらう。(略) 茂吉先生の随筆群は、よく『研磨』され計算された文章」<sup>12)</sup> であるという。なお、別の手帳「手帳二十三」<sup>13)</sup> に事の顛末を記録したため、随筆『手帳の記』が迫真をもって書くことができたのである。茂吉は出雲大社から単身、益田駅に引き返した。手帳には次のようにある。

益田駅ニ着キ昨日ノ運転者ヲヤトヒ人丸神社ニ行キカヘリ来リタル道、猿ニ餌ヲヤリタル処、絵ハガキヲ買ヒタル処、小高キ処ノアヅマ屋ノ処ナドヲ見レドモ無シ。絵ハガキ屋ノ若イ細君ニ『ドウモゴ都合ガ悪ウゴザイマスネ。私ノ処ニアリマスナライツデモオ知ラセシマス』ソレヨリ小便ヲシタルトコロナヲ逍遥シテモナク。茫然トシテソココ、ニウロツキタルガ、念ノタメニ社務所ニ御願シテ賽銭箱マデ明ケテ見テモラツタガ、ナカツタ。ソレカラニタビ人丸神社ヲ参拜シ、守護ヲ受ク。シホシホトシテ石段ヲ下リタ。<sup>14)</sup>

賽銭箱の中まで検めるとは、尋常ではない。さらに搜索は続く。

ソレカラ運転手ト二人デ処々ノ人々ニ問ヒ、御願シテ来ルト青木屋ノ番頭トヒツコリアツタ。彼ハポスター様ノ紙二枚ヲ持チテ、店ニ貼ル処デ竹ノ子ノ皮ニのりナドヲ持ツテ来テキタ。ソレカラ巡查駐在所ニ行キ、届ケ御願シ、ソレカラ高津小学校ニ行キ、首席訓導ノ尾木氏ニ御願シタルニ『非常招集』ノ鐘ヲ鳴ラシテ児童ヲ集メ、『東京ノ青山脳病院ト云フ大キナ病院ノ院長サンガコノタビ人丸神社ヲ参拝サレテ』云々ト云ツテキル。(略)番頭ニ10円ワタシテ5円広告料トシテワタシソシテ寂シイ顔ヲシテ益田駅ヲ四時四十分ニ出発シタ。<sup>15)</sup>

必死の形相で懇願する茂吉の姿が想起される。あくまでも歌人ではなく、青山脳病院院長の立場である。「非常招集」された児童も甚だ迷惑な話である。

○午後四時五十六分汽車石見横田駅ヲ過グルコロ、汽車ボーイ来リテ「斎藤サントイフ居リマスカ、ハ、サウデスカ、アノ益田駅カラ電話デ、鉛筆トカ無クサレタノガ、アリマシタサウデス」「サウデカ、ソレハアリガタウ」ト云ツテワカレタルガ、僕ハ実ニ感謝シテ感慨モ亦無量ナリ。ソシテドコニドンナ工合ニシテアツタカト云フコトガ今度ハ好奇心ニカハリタルナリキ。<sup>16)</sup>

紛失したのが手帳から鉛筆に錯誤しているが、見つかった歓喜の叫びを「感謝」「感慨」「無量」と表現している。

○物ヲ紛失シタル時ノ心ノ経験ハ大正十年クレ「ベルリン」以来ノ経験ナリ。サウシテイルウチニ「青原駅」ニツイタ。駅長ワザワザ車房ニ来リ「サイトウサンキラレナスカ、手帳ガアツタサウデスガ、ドウシタラヨロシウゴザイマスカ、」「ドウゾ東京ノ方ニ送ツテ下サルヤウ御伝ヘ下サイ、ドウモ難有ウゴザイマシタ」!

○汽車長門経峡ヲ過グルコロ布野ノ中村憲吉君同、平福百穂画伯宛ニ「チヨウメンアツタゴアンシンネガフ イロイロアイスマヌ アスアサヒロシマツ」ト至急報ニテ打電シタ。代価1円75銭デアル(略)

○小郡駅7時37分著、すし20銭買食 八時ニ発車 食堂ニ行キチツプトモ2円払フハムサラダ。ハムエツグス。白ビール大一本 黒ビール小一本 ソレヨリ少シヅ、眠ラントス。<sup>17)</sup>

茂吉は上機嫌に微酔気分となり、何日かぶりに睡魔に襲われたのである。創作ノートともいふべき手帳を読み、随筆『手帳の記』と読み比べると、手帳に基づく事実の連続ではなく、茂吉の巧みな創作の過程と人間性を読み取ることができる。このように手帳の存在意義は大きいのである。自今以後、手帳に必ず次の文言を書いた。

この帳面、若し万一、誤って取おとし候やうの場合は、御ひろいの方は左記に御届けください。応分の薄謝を拝呈いたします。東京市赤坂区青山南町五ノ八一斎藤茂吉。<sup>18)</sup>

茂吉は、手帳紛失のことを歌に詠んでいる。見つかったので「ユーモアー」と詠んでいるが、ペースが相応しいであろう。

うしなひし物見つかる顛末もあはれに響くユーモアーのみ  
うつしみ 現世の吾もこよひはたのしくて君のいびき 躰のそばにいねたり

(『連山』『日本本土』昭和5年)

### 3. 齋藤茂吉の病誌

「手帳二」は表紙に『雑記帳大正九年七月』と墨書してある。縦16.1糎、横10.8糎の布装で、1920(大正9)年7月28日から同年11月23日までである<sup>19)</sup>。茂吉の病誌を語るに貴重な資料が残されている。

1918(大正7)年から1920(大正9)年にかけて、「スペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザがパンデミー(世界的流行)となった。日本へも1918(大正7)年秋に上陸し猖獗を極めた。長崎医学専門学校教授であった茂吉も1919(大正8)年の暮れに罹患し、翌年となり肺炎を併発し、生命を危ぶむまで悪化した。2月14日まで病臥にあり、同月24日に職場に復帰したが、本復というには程遠かった。

同年6月2日に突然の咯血に見舞われ、8日には再咯血した。6月25日から10日間余、県立長崎病院へ入院した。退院後は転地療養のため、7月26日から8月14日まで、温泉嶽(雲仙)よろづ旅館へ行き、一旦長崎へ帰ったが、8月30日には佐賀県唐津海岸の木村屋旅館へ、9月11日から10月3日までは佐賀県小城郡古湯温泉の扇屋へ投宿し転地療法に努めた。次からは「手帳二」にある1920(大正9)年8月25日以降の記録である。

二十五日 朝出ヅ、分量や、多く、赤の濃き処あり (略) 晝寐 少出ヅ (略) 仰臥漫録を読む

二十六日 盆 / 午前三時頃痰吐く、朝見るに、全く紅色にて動脈血も交り居る如し  
 温泉にて出でたる如き色にてあれより分量多し、

Haemoptoe なることにはじめて気付きぬ、

朝、痰少量、色紅まじる、あとは、血ノ ストライフエン 線 を混ず、

入浴、淫欲、カルチモン0.五、原因を考ふべし

朝、怒の情なくなり、全然人を許し、妻をも許し愛せんとする心おこる。

夕日さす浅茅が原の旅人はあはれいづくに宿をかるらむ-経信、

しづかなる我のふしどにうす青きくさかげろふは飛びて来にけり

しづかに生きよ 茂吉われよ<sup>20)</sup>

医者である茂吉は、このHaemoptoe(咯血)はインフルエンザではなく、結核を自覚し覚悟したと推察される。当時、結核は死の病である。二十五日には、結核から脊椎カリエスとなった正岡子規の病床随筆『仰臥漫録』を読み、二十六日には「朝、怒の情なくなり、全然人を許し、

あれほど確執のあった妻てる子に対し「妻をも許し愛せんとする心おこる」、そして最期に「しづかに生きよ 茂吉われよ」とある。この「手帳二」から、病気をあるがままに受容する茂吉の諦念(レジグナチオン)を読み取ることができよう。また、神の加護も念頭にあり、生への意志と執着も読み取ることができる。その後、血痰の色、量などの連綿と几帳面に記される。

二十七日 盆 / 午前五時半 昨日ヨリ分量少ナケレドモ全ク紅色 / 午前中横臥ス、午後四時吸入、痰少シ色ツク、午後十時吸入痰出デズ、十一時二十分淡紅色出ヅ (少シ)  
二十八日 / 精霊ナガシ / 午前二時咯出シタルニ色ツカズ。 / ウツラウツラシテ朝九時吸入時、肉色中等量

二十九日 / 朝三時頃ノモノ色ツカズ (心持桃色カ)  
朝八時ノモノニ太イ線ノ如クニ色ツク、二三回、(略)

三十日 朝四時頃色ツカズ、六時、極ク淡紅色、然るに洋服著て少し鬱屈ノ感アリシガ淡紅色ニ色ツク。(午前七時半) 夕七時、少しく色づきたるものいづ / (略)

八月三十一日 朝五時、第二切ニ淡色、七時、淡紅色 分量少なシ (略)  
夕食後 - 淡紅色ノ線ニ點 (略)

九月一日 朝六時起床、痰出デズ。海岸を散歩シ、城アトノ砂道ヲ歩ミナガラ咳シテ痰ヲ出シタルニ淡紅色ノ槐(原)に稍濃キ紅色ノ太キ線ヲ混ズ、次イデ、第二回、稍濃淡紅色ノ塊、太い線 ついで、色濃くなり出でず 要之、昨日よりも色濃し しかしこれ咳して痰を咯出する際の出血なりしが如し。痰をも少し楽に咯血することを得ば結果よからんか、明朝よりも少し寝坊して自然に痰ノ出ヅルヲ待ツ方可ナランカ (略)

二日 朝、痰少シ。鮮紅色の槐(原)あり。午前一回極少出ヅ、/ 午前三時半水泳、のち淡紅色出づ / 夕食後直ぐ寝につけども鮮紅ノ少槐いづ (略)

三日 朝、痰やゝ多く、鮮紅ノ血痰咯出、のち出でず、(略) 夕方少し淡紅色、臥床後二點紅色いづ、

四日 朝痰イデズ、(強ヒテハ出サズ) 洗面後極少ク紅點出ヅ、/ 朝食後便所ニテ極小紅點一ツノミ (略) 午後六時、のどにからみたる痰を無理に出したるに淡紅色出づ

五日 夜二點いづ / 朝色つかず (略) 午後食後、淡紅色 / 湯浴二回 全くいろつかず

六日 朝、痰少ナク、朝食前痰カラミ、少々色ツクノミ (略) 午後五時 浴、色つかづ 白色痰 / 午後八時 浴 後、淡紅色痰少シ (略)

七日 朝、痰多く、血痰を混じ、少しく悲観、(略) 床に入り手てより淡紅色三回 (略)

八日 痰多く血液混ズ あと二三回出づ、(略)

九日 朝、分量多ケレドモ淡紅色ナリ。(略)

十日 朝分量多ケレドモ極メテ淡シ / (略)

十一日 天気ヨシ、淡紅色ノ部分局限少ナシ (略)

十二日 天気晴朗、朝七時、痰多量ナレドモ黄褐色後黄色 (略)

十三日 天気吉ノチクモリ少々雨 / 午前六時 痰少シ 前日ヨリモ紅ヤ、強キ淡紅色

- 十四日 / 細雨終日 / 分量多シ、黄色或ハ黄褐色
- 十五日 / 天気吉 / 朝二回分量中等、黄色 (略)
- 十六日 / 天気吉 / 朝、分量少、黄色 (略)
- 十七日 / 曇 / 朝、痰色ツカズ。(略) 正午、痰ヲ無理ニ出シタルニ血點出ヅ、どうも浅い処からだその決心つく。(略) 帰室略出、淡紅色 (ツマリ血線ノ集リ) 多量、臥床
- 十八日 / ハジメ色ツカズ、二度目、血線ヲ混ジ、三度目血痰 (鮮紅色ナリ) / 洗面ノ時ニ血點二三、(略)
- 十九日 / 子規忌 (略) 朝、痰出デズ。故ニ無理ニハ出サズ。(略)
- 二十日 / 曇 / 朝七時二十分ハジメノ痰寒天様、二度目ニ血點二三ヲ混ズ (略)
- 二十一日 / 曇 / 朝七時半、ハジメノ痰寒天様ツバイテ5厘錢大位ノ血線集合 / 食後モ痰多シ、色ツカズ。(略)
- 二十二日 / 晴 / 朝八時、起キテジツトしてみて、色ツカズ 食後便所ニテ一血點出ヅ (略)
- 二十三日 / 晴 / 朝七時、痰分量多ケレドモ色ツカズ 痰ハ主ニ寒天様ナリ、風邪気味依然。(略)
- 二十四日 / 朝後曇 / 全ク出デズ、痰、寒天様ニ少シク黄色ヲ混ズ、(略)
- 二十五日 / 雨後ハレ / 全ク出デズ、痰白ク少シ、(略)
- 二十六日 / 天晴 日曜 東京子規歌会 / 全ク出デズ、痰白ク (黒點アリ) 少シ (略)
- 二十七日 / 天気吉 (月) / 全ク出デズ、痰白、少ツヅ、数回 (略)
- 二十八日 / 朝入浴、室にカヘリ、無理ニ出シタルニベにがら色少シク色づく (略) 痰出シタルニ褐色、大豆大ぐらゐノモノ交れり。(略)
- 二十九日 / 秋の雨ふる / 全ク出デズ。(略)
- 三十日 / 秋の雨 / 全ク出デズ、朝浴せず。(略)
- 十月一日 / 晴曇常ナシ / 朝起時イデズ。(略) 帰宅シテ口漱シ體ヲ拭キタル後、痰ヤ、深キ処ヨリ出ヅ、褐色少シ混ズ。思フニ、呼吸道ヲ強く働カセル時ニハ未ダ悪シキモノノ如シ
- 十月二日 / 吉 / 全ク出デズ、(略)
- 十月三日 / 清吉 / 全ク出デズ、(略) <sup>21)</sup>

茂吉は、一日も怠りなく執拗なまでに念入りに、朝だけではなく昼夜を問わず、血痰の量や色を観察し分析し、「手帳二」に記録した。痰の量が減少し、痰の色が鮮紅色、淡紅色、黄褐色、黄色へと徐々に変化している。快方へ向かうと思うと逆戻りし悲観し、一喜一憂している茂吉の姿を髣髴させる。黄褐色に変化した時には二重丸の圈点が付いている。さらに、九月二十三日になり「色ツカズ」とあり、二十四日には「全ク出デズ」とあり、日付の前に丸印を数日付けている。

そして、十月四日「不出」、十月五日「不出、痰ヤ、多」、十月六日「不出 痰少シ多」、十

月七日「不出 痰や、多」とあり、十月八日以降は「不出」と十月二十日まで続く。その後は、血痰の量や色に関する記載は無くなる。

このような咯血があり、死も覚悟した茂吉であるが、恢復していくとは奇跡とも言うべきであろう。

#### 4. 精神病医斎藤茂吉

歌人として高名な茂吉であるが、本業は精神病医であり青山脳病院院長であった。「手帳」には作歌のためのスケッチ、備忘録、短歌の草稿などがあり、基本的には歌人茂吉の研究に重要な資料となる。一方では、青山脳病院は空襲で焼失し、病院関係の資料は灰燼に帰したので、精神病医茂吉を知るに貴重な記録も残っている。次に、「手帳」から精神病医茂吉に関連する特筆すべき内容を拾ってみることにする。

青山脳病院は松原を「本院」、青山を「分院」と称していた。「手帳十八」<sup>22)</sup>には、1929(昭和4)年2月22日現在の青山脳病院本院の現状が記されている。手帳のメモを整理すると次のようになる。

定員は360名で、現在353名である。代用患者は292名で、男176名、女116名である。

自費患者は、62名で、男44名、女18名である。看護人は83名で有資格5名、無資格78名で、男は52名、女は31名である。医師は5名、薬剤師は2名である。<sup>23)</sup>

当時は精神科病院のことを脳病院と称していた。代用患者とは、私立脳病院が受け入れた公費の患者のことであり、安定的な収入が得られた。定員充足率は98.05%である。代用患者は82.72%という高い割合である。看護人は患者2.84人に当たり一人である。

なお医師5名とは、院長の茂吉の他に、青木義作(養父紀一の妻ひさの弟のこども、茂吉の妻てる子とはいとこ)、斎藤平義智(紀一の姉の子)、斎藤為助(紀一の養子、五女の愛子と結婚)、並河五郎である。院長は月水金、斎藤平義智が月金、青木が木土、斎藤為助が日火(夜)、並河が毎日である。薬剤師には守谷誠二郎(茂吉の甥)がいる。斎藤家の一族による病院経営であることが分かる。次のように続く。

(二) 訓練スルコト。○鐘ヲナラシテ。/ ○電燈、提灯。/ ○小峰。甲ニ出レバ乙ニ避難スル。消火栓、バケツ。○砂囊、/ ○池袋。マカナヒ。/ アワテル。訓練スルコト大切デアル。非常召集。/ カウ云フ時ニハドウスルカトキク / ○カキヤ。/ 十七 / ○笛ヲフク。バケツ、三ツ甲ノ場処ヨリ乙ノ場処。/ 患者ヲチラシテモカマハヌ

○小峰病院。火鉢、鉄アミ。夜六時。夜十時ニ当直医ガマハル。/ 加命堂、六時。十時(医局)

○事務五六人宿直、/ ○各病院ノ看護ハ医局、医局、事務ト共ニカントクヲシテキル

○煙草ノマセヌ(山田病院) / ○井之頭(巻草、一定個処。見張看護人ノ処、煙草ヲ

アヅカル。)ナルベク特定ノ場処 / 「マツチ」ノ注意 / ○漏電(会社ニヨリシラベテモラフ。)

処ニヨリテハ毎月来ル。/ 電気協会(会費五円。年ニ二遍) / ◎退院患者ガ鍵。ネヂマハ

シ等ヲ入レル。/ 退院患者同志ノ面会ハワルイ。

○ (七) 公安上危険ノ懼アル患者ニタイシテハ看護人ヲ専属セシムル等適当ノ処置ヲトルコト (入院費用ノ関係上、出来ナイ場合モアルベケレドモナルベク注意ヲ払ツテモラヒタイ) (見張ノソバノ部屋)

○ (八) 非常口ハ常ニ完全ニシ且ツ避難ノ障礙トナルベキ物品ヲオカザルコト且ツ非常口ノ鍵ハ所在ヲ明ニスルコト / コレハ看護人ノ訓練、見張ノ交代。

○ (九) 医師、看護人ノ数規定数ニ満たザルアリ又医師専属ナラザリヤノ疑アリ。コレハレー行シテイタツク。/ ○一人タノンデ旅行シテハイカヌカ (ソレハオモテムキニハ行カヌ) / ○院長ナドノ知ラザル者ニ無責任者アリ

○ (十) 往々、命令患者ニ対スル衣食ノ給与又ハ取扱方ニソノ当ヲ得ズト思フ向アリ。  
(衣類ハ汚穢、破レテキルトカ。一般社会ガ見テ 食物。/ (衛生部長ハ眼鏡ナシ。若イ、面長デ、ヤサシイ人デアル。)/ 社会的ノ事業トシテ考へて欲しい。代用病院、遺憾ト思フ点ガ多イ。素人ガ見テ。

○ (十一) 手続ヲ要スル事項ニシテ故ナクコレヲ怠リ或ハ遅延スルコトアリ。充分ニ注意スルコト (医者ノ届出。看護人ノ出入等)

○ (十二) 病室付炊事場ノ清掃不十分ノモノアリ特ニ便所、污水処方甚シク不適當ノモノアリ。加命堂ヨシ。土間、ト炊事場トノ境界ヲヨクスル、コレハ面白クナイ

○ (十三) 濫ニ病室内ニテ作業セシメル向アルヲ以テ必ズ指定ノ場処ニテ作業セシメルコト / 病室ニ布団ヲツミアゲルコトハ / (衛生部長ト学務部長ト)

(松澤氏) 病院ノ管理人ヲキメヨ。(命令ヲ徹底セシメル要) 責任者。/ (二) 注意簿。  
(警察ヨリ注意サレタル個所) (永久保存ノ)

○看護人ノ所定資格。看做シテ頂クコトヲ得。(現在勤務、一年以上、身元確實ナルモノ) コレハ警視庁管内。病院内ダケ。所定ノ資格「精神病ノ看護法」、「衛生法規、消毒法、精神病者監護法。」免状ナシ、たゞ病院内ニテ作レバ警視庁

○火災報知器 (患者イタヅラスルベシ) <sup>24)</sup>

一部に判読し難い内容もあるが、精神病院を経営する院長茂吉の懊悩を読み取ることができよう。一つは防災対策である。青山脳病院は1924(大正13)年12月29日に餅つきの残火の不始末から失火し、300余名の入院患者中20名の犠牲者出る惨事となった。他の病院でも失火があり、近隣住民に不安を与える公安上においても社会的な問題であった。避難経路、防火体制の整備、煙草の件、非常口の注意事項など防災対策が列挙してある。

当時の閉鎖病棟では逃げ遅れて死亡した患者も少なくない。一つは看護人の待遇である。有資格者の数は少なく、殆どが無資格者である。看護人の成り手がいない状況なのである。世間では精神病患者だけでなく、精神病院の看護人に対しても否定的な眼差しを見た。また、患者からの暴力も少なからず経験する。さらに一つは衛生問題である。

小峰病院の前身は王子脳病院である。「大正十二年、火災で病棟が半焼するが、十四年には新たに小峯病院(内科・精神科)となり、さらに滝野川病院と改称する」<sup>25)</sup>とある。また加命堂とは、城東区亀戸町にあった加命堂脳病院のことである。地域住民に配慮してか「亀戸」をあえて「加命堂」としたのである。

## 5. まとめ

「手帳」という本人だけの閉じられた空間を、他者が開くことにより魔法が解かれたように、作者の性格などを読解することができる。茂吉の「手帳」に、永井ふさ子との案件が記されているのではという期待感と昂揚感があったが、とくに記すことも無く拍子抜けする。それだけ茂吉は、ふさ子との関係を警戒し注意深く交際を重ねていたのである。後日のふさ子の告白は、茂吉との堅固な約束を反故にするものであった。

## 注

- 1) 斎藤茂太・北杜夫(1980)『この父にして－素顔の斎藤茂吉』p.129、講談社文庫。
- 2) 斎藤茂太『茂吉の体臭』(2000)「父の性格と体質と人となり」pp.1～34、岩波書店。
- 3) 平福百穂(1877～1933)本名は貞蔵。日本画家・歌友。『アララギ』発行費や茂吉の留学費援助を行う。洋行後、帝国美術院会員、東京美術学校教授。
- 4) 中村憲吉(1889～1934)歌友。大阪毎日新聞記者を経て、『アララギ』に発表。島木赤彦と『馬鈴薯の花』を出版。
- 5) 阿川弘之・北杜夫編(1986)『斎藤茂吉随筆集』p.223、岩波文庫。
- 6) 同書、p.224。
- 7) 同書、p.224。
- 8) 同書、p.224。
- 9) 同書、p.225。
- 10) 同書、pp.229～231。
- 11) 「手帳二十二」縦16㎝、横10.1㎝、紙製、無罫、裏表紙に『北平二』と墨書。
- 12) 同書、p.345。
- 13) 「手帳二十三」縦16.4㎝、横10.7㎝、グラフ用紙の手帳、左表紙に『百穂憲吉ト山陰旅行 益田大社布野』と墨書。
- 14) 『斎藤茂吉全集』(1974)第27巻、p.466、岩波書店。
- 15) 同巻、pp.466～467。
- 16) 同巻、p.468。
- 17) 同巻、p.469。
- 18) 山上次郎(1974)『斎藤茂吉の生涯』p.410、文藝春秋。
- 19) 『斎藤茂吉全集』第27巻、p.961。
- 20) 同書、同巻、pp.59～60。
- 21) 同書、同巻、pp.61～73。

- 22) 「手帳十八」縦10.7糎、横5.6糎、紙装、横罫、主として鉛筆(黒・赤)、一部ペン及び毛筆で横書き。  
期間は昭和4年2月頃から6月頃。
- 23) 『斎藤茂吉全集』第27巻、p.373。
- 24) 同巻、pp.373～375。
- 25) 近藤祐(2013)『脳病院をめぐる人びと』p.71、彩流社。

**参考文献**

小泉博明(2016)『斎藤茂吉 悩める精神病医の眼差し』ミネルヴァ書房

(2019.9.20 受稿, 2019.10.21 受理)